

作業科学の振り返りと今後の展望

宮前 珠子

初代日本作業科学研究会会長 聖隷クリストファー大学

「人間は作業的存在である」という中心的概念のもと、作業科学は「作業の形態 (form), 機能 (function), 意味 (meaning)」を研究する基礎社会学領域の学問として1989年南カリフォルニア大学 (USC) に誕生した。「心理学が行動に、社会学が社会組織に、文化人類学が文化に焦点を当てるように、作業科学は作業に焦点を当てる学問」とする壮大な考えのもとに始まったのである。その後、「作業科学 (OS) は作業療法 (OT) を助けるものとならない」とする Mosey との論争を経て、1993年に「OS は基礎科学であると同時に応用科学」であり、作業に関する研究は全て OS であると再定義された¹⁾。

2005年 F.Clark^{2,3)}は、OS 誕生16年を振り返る講演を行い、存亡の危機に瀕した2つの学問の振り返りから、「これまで順調に発展してきた OS が引続き繁栄するためには、時代と環境の変化に対応し続けなければならない。OS の存続を可能にする要因は、「知的バイタリティ、学生を惹きつける能力、強い財政基盤、肯定的政治状況」である。OS が活動的、健康であるためには OS 論文が新しい博士号取得者によって指数関数的に増えなければならない。これまで量的論文よりも質的論文が多く発表されているが、世界的な研究社会のゴールドスタンダードを考えると、多人数対象の「量的研究」を生産することが重要である」と述べた。そして最後に、「OS 研究の OT へのエビデンス提供→OT 需要の増加→OT コースへの入学者増加→財政基盤の強化→OS 研究の基盤強化」という OS と OT の再生産サイクルを図示した。

このような考えがある一方、OT 研究と OS 研究の間に線を引く立場もある。

Journal of Occupational Science の編集者であるニュージーランドの C.Hocking(2010)⁴⁾は、第14回 OS セミナーで講演し、OT 研究と OS 研究の違いについて、前者は、「OT、クライアント、学生」が参加者で、「治療関係、評価ツール、介入効果」について研究するのに対し、OS

研究では、「健康状態にある人とそうでない人」が参加者で、「日常作業」が研究テーマであるとし、基礎科学としての立場を守ろうとしているように思われる。OT に密着した発展を目指している米国とは OS の定義が異なり、医療・教育制度の違いが OS 研究の考え方にも反映していることが伺われる。

OS が OT の世界で正式に認知されたことは、OT 教科書のバイブルである Willard & Spackman's Occupational Therapy⁵⁾ に章として取り上げられたことから明らかである。その変遷をみると、2003年に出版された第10版では第2章として OS が12頁にわたって解説され、第11版(2009)では第1部の1章から9章までの96頁が「OS と人の作業的本性」となり、OT の枠組み全体の説明に OS という用語が用いられている。一方、第12版(2014)では、第7章「作業科学—作業の研究」というタイトルのもと11頁が割かれるのみとなり、OT 実践に対する OS の量的研究の重要性を強調するものとして、脊髄損傷者の褥瘡に対する OS 的アプローチと従来型アプローチの比較など、対照群をおく3つの数百人単位の研究が紹介されている。これは先に F.Clark が示した量的研究への価値付けと一致し、OT へのエビデンス提供にエネルギーが傾注されていることを示すものと考えられる。

このような OS の方向性の差異や変化にどのような背景があるのか確たることは不明であるが、OS はそれぞれの国情や時代に対応して、自由度と柔軟性を持って生き残り発展の道を探っているように思われる。それでは、我が国の OS はどうであろうか？

1989年 USC に OS が誕生して27年、1995年佐藤剛氏が F.Clark 氏を招き札幌で第一回 OS セミナーを開催して21年、2002年暮れに佐藤剛氏が急逝され、2006年日本 OS 研究会が発足して10年が経った。毎年 OS セミナーが開催され200名前後の参加者を集め、2007年12月に発刊された「作業科学研究」は昨年で9冊になった。

数では、最近のセミナーの一般演題数は 10 題前後、「OS 研究」9 冊に発表された研究論文は実践報告を含めて合計 14 編と少なく、英文添付、OS 研究としての採択基準の分かり難さなどが敷居を高くしているのではないかと考えられる。一方、「作業療法概論」「基礎作業学」の教科書最新版を見てみると、日本 OT 協会のものは索引に作業科学という用語もなく、医学書院のものは用語のみ、メディカルビュー社のもののみ、少々内容まで踏み込んで OS が取り上げられていた。OS とは何かを研究会でわかりやすく定義し広く伝える必要があるように感じられた。他方、日本 OT 協会が、OT 起死回生の策として打ち出した「生活行為マネジメント」の中心概念は「人間は作業的存在である」であり、OS の中心概念と一致する。我が国で現在ほど OS 的研究を推進し OT にエビデンスをもたらすことが求められている時はこれまでなかったように思われる。現在我が国の OS 学者に求められるのは、F.Clark が示した OT と OS の再生産サイクルの実現ではないかと思われる。

文献

1. Clark, F., 宮前珠子：作業的存在としての人間を研究する作業科学. OT ジャーナル 34(12):1157-1163, 2000.
2. Clark, F. : One person's thoughts on the future of occupational Science. Journal of Occupational Science 13 (3):67-79, 2006.
3. 宮前珠子：作業科学の系譜と今後の発展. 作業科学研究 2(1):2-6, 2008.
4. Hocking, C. : 作業科学研究の現在と未来. 作業科学研究 5(1):14-30, 2011.
5. Willard & Spackman's OT : Lippincott, Williams & Wilkins. 10, 11, 12ed., 2003, 2009, 2014.